

「当たり前」の大切さ

山王中学校3年 徳永 乙栞

今、日本ではSNSやテレビなどで世界の現状を知ることができる。他の国は未だに国内での戦争が続いていたり、かつて仲の良かった国同士が土地や資源を得るために争い合ったりしている。では、日本はどうだろう。現在は大きな戦争と呼ばれるような争いはないが、昔はどうだったのだろうか。

私がそれについて考えるきっかけになったのは、とある先生の一つの話だった。その授業では、今から約八十年前に起こった原爆について話していた。私はその時、小学生ながらに当時の生々しい被害状況を知り、思わず涙が出てしまいそうなくらい胸が苦しくなった。そんな私たちに先生は、先生の旦那さんの祖父に当たる人物のある体験談を語ってくれた。

日本が終戦を宣言する少し前のこと。日本は「神風特攻隊」という攻撃部隊を結成していた。そこに所属する人は爆弾をつけた航空機を操縦し、そのまま敵国に体当たりをして攻撃をしなくてはならないという命令を受けていた。そんな客観的に見れば非人道的な計画に先生の義理の祖父は、参加する予定だったそうだ。最終的にはその予定の前に終戦が宣言され、無事家に帰ることができたと先生は教えてくれた。それを聞いて私は、安心すると同時にもしものことを考えた。もし終戦の宣言が少しでも遅く、彼が実際に計画を決行していたら、先生の旦那さんやお子さんは生まれていなかったかもしれない。その話を聞くまでは、戦争によって奪われる命はその時代に生きていた人々のものだけだと思っていた。だが、それだけではない。戦争や争いは、未来に繋がれるべきだった命をも無くしてしまうのだ。

そして、それは戦争だけではない。私が父の仕事の関係で欧米の土地に二年半ほど住んでいた時、他国から移住してきていた同年代の子たちと話す機会があった。そのなかには私と同じく親の仕事が理由だった人もいたが、母国の治安が悪いことを理由に来ている人が多かった。私の特に仲の良かった友人は、親の仕事を理由に小さい頃に引っ越してきたそうだった。その子の母国は治安があまり良くないらしく、度々そのことについて話してくれた。

そんなある日、彼女が夏休みに一人で母国にいる親族に会いに行くということを私に伝えた。話をよく聞いていたからこそ、もし二度と会えなくなったらと不安な気持ちになってしまった。そこで初めて治安の良い日本に住ませてもらったことがどれだけ幸せであるかを実感した。争いによって一つの命が無くなるのは、戦争だけではないことも学んだ。結果的に友人とは夏休み明けにお互い元気な姿で会うことができたが、会えなくなっていた可能性もあったと考えると、今でも辛い気持ちになる。

このように、世界には数々の平和ではない地域や、時代が存在している。私たちが今送っている日常は当たり前ではないものだ。普通だと思っている毎日は、世界のどこかにいる人にとっては普通ではないのかもしれない。生きていられるのは、誰かが命を一生懸命繋いでくれたからだ。誰しも人生のなかで孤独を感じる時があると思う。そんな時は、視野を広げてみると良いのかもしれない。辛さも悔しさも悲しさも抱えているのは自分一人だけではないし、独りで生きているわけでもない。平和な環境にいる私たちだからこそ、それを忘れずに、当たり前になりつつある平和の大切さを知っておくべきなのだと私は考える。